

# 中国でつくられた動物たち

菅豊

## 動物をめぐる想像力

悠久の歴史をもつ中国の大地には、奇つ怪な動物たちが闊歩してきた。

いまでもジャイアントパンダ(大熊猫)やキンシコウ(金絲猴)など珍しい動物たちが生息する。きつと、中国の奥地には、われわれの出会ったことのないような奇妙な動物たちが、もつとたくさんひそんでいるはずである。湖北省の神農架という山奥には、身長3mに近い野人の伝説が語り継がれ、嘘か真か最近では野人と称する動物の姿が撮影されているが、あながち作り話と一蹴できない歴史と自然の奥深さがそこにはある。

その中国には、もつと古い時代には、さらに怪しげな動物たちがひしめいていたようである。中国古代に成立したと思われる地理書兼博物誌の『山海経』(現在伝わる刊本は明代以降のもの)には、各地の奇獣、珍獣、怪獣たちが網羅されている。そこでは、頭、手、脚、尾などの身体部位が、人々に奇異の念を抱かせるに十分の形状、数となって描かれている。また、ギリシャ神話に登場するキメラと同じく、体の各部

すが・ゆたか 1963年生まれ。筑波大学第一・人文卒。同大学院博士課程退学。汎アジア部門助教。専攻は、文化人類学。著書論文に、「開コオロギからみた中国漢人都市民の自然観」(『北海道大学文学部紀要』47-4)、『修験がつくる民族史―鯉をめぐる儀礼と信仰―』(吉川弘文館)など。

野人の伝説 中国各地の山に多毛の野人が住むという話が言い伝えられており、とくに、湖北省神農架の野人は有名である。神農架は国家級自然保護区になっており、その急峻な深山はまだまだ人を容易に受け容れないため、神秘的な場所となっている。1950年代からその野人は注目されており、現在でも目撃談が絶えない。

『山海経』全18巻からなる中国古代の地理書兼博物誌で、確実な成立年代は不詳。序を付した郭璞(かくはく)は276年山西省に生まれる。古くは儒教的価値観から、怪力乱神の類を描く同書は荒唐無稽な格下の俗書として扱われたが、その民俗学的価値は特筆すべきものがある。

『点斎画報』に登場する「異魚」。「鯉魚」は鶏のような脚であったが、これは犬の前脚のようである。

辣辣 状如羊一角一目目 在耳後出赤鼓山



辣辣 角と目はひとつしかない。その目も耳の後ろについている。

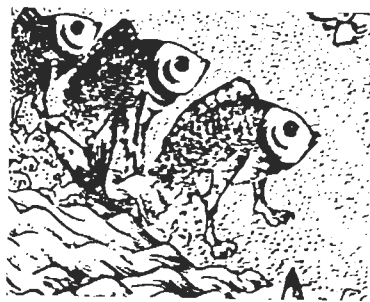
鯉魚 状如魚而雞足 出漢晉之水



鯉魚 鯉のようなからだに、鶏のような二本脚がついている。

(『抱朴子・列仙伝・神仙伝・山海経』、平凡社、1969より転載)

位として、数種類のベースとなる動物の一部を合体、融合して描かれている。例えば「辣辣」。これは、一見、何の変哲もない「羊(ヤギ)かヒツジか不明」であるが、よく見れば角はひとつ、目がひとつしかない。さらに、その目は耳の後ろにあるという変わり種である。また、「鯉魚」。これは、獄法の山に流れる泰沢という川に棲む魚で、その形は鯉のようであるが、鶏のような2本



普通のヒツジである。ところが、湖羊が保持している動物としての特徴、とくに繁殖能力は、草原地帯を走りまわるようなわれわれの知っている普通のヒツジと比べると格段に異なっている。

湖羊が普通のヒツジと大いに異なっている点として、第1にその早熟さを挙げることがができる。普通、ヒツジを生活の基礎とする遊牧社会では、ヒツジはゆっくり成長する。例えば、中国・内モンゴル自治区に居住するモンゴル遊牧民のヒツジは、通常数え3歳の春に出産し、それより早く早く出産するものは、子育てをしないようになるのでむしろ好まれない。一方、湖羊は雄・雌ともに生後4、5か月で性成熟し、6か月齢あたりから実際の繁殖に使われる。湖羊は、生まれて半年で立派な大人のヒツジに



湖羊 湖羊は、豚小屋と並んだ薄暗い陋屋(ろうおく)で過ごす。終生、この部屋から出ることはない。

で飼育されるヒツジとは、大きく異なった特異性を有するようになっていく。

湖羊の特異性は、その身体的な特徴にある。さすがに角1本、目1個で、その目が耳の後ろにあるという代物ではない。見た目は、白くてかわいい

脚をもつという。食べると疣を治してくれるらしい。「鱧魚」に類する魚は、いまから百数十年前にも中国近海を泳いでいたらしい。19世紀末に上海で出された絵入り新聞『点石齋画報』によると、その生息場所は高麗の黄海道のある島とのことで、「鱧魚」と異なり海水域に生きている。その形は、頭や尾鰭は普通の魚であるが、やはり2本脚がついている。島の人が試しに食べてみたところ、腹痛を起こしたというから長い年月のなかで古代の薬効は失われたようだ。

もちろん、このような神秘的な奇獣、珍獣、怪物が、かつてほんとうに中国の山野を歩き、河海を泳ぎ、天空を飛んでいたなどと主張するつもりは毛頭ない。しかし、それらの動物を、単に奔放な想像力の産物として片付けてしまうことができないような、動物をめぐる不思議な歴史と文化が中国には存在するのである。

### 歴史が刻み込まれたヒツジたち

中国長江の南、浙江省嘉湖地方では、湖羊(英名 Hu Sheep)という奇妙なヒツジが飼育されている。この地域は、モンスーン気候下における集約的農業の卓越地域で、本来はヒツジなど牧畜的家畜を飼育するには適さない土地である。湖羊は、通常ヒツジ飼育の行なわれる乾燥した放牧地帯とはかけ離れた環境で、長期にわたって舎飼い(ヒツジ小屋のなかに閉じ込める方法)されたことにより、一般的な牧畜地域

なるのである。

第2に、湖羊は一年中繁殖できる点で普通のヒツジとは異なっている。一般のヒツジの雌は、基本的に日が短くなった秋口から初冬にかけてしか発情しない。熱帯や低緯度地帯において通年繁殖は確認されているが、中緯度地域では通年で繁殖する品種はほとんどいない。しかし、湖羊の雌は妊娠さえしなければ、一年中春夏秋冬の区別なく約17日周期で発情する。この通年繁殖性によって、時には1年に2回、2年に3回という連産が可能となっている。とにかく、湖羊の雌はのべつ幕なく子供を身籠っているのである。

さて、第3に湖羊は1回の出産で複数の子ヒツジを産む点で、一般のヒツジとは異なっている。ヒツジは品種により1回に出産する子ヒツジの数にばらつきがあるが、伝統的放牧社会にあつては、多胎出産はそれほど多くはないようである。例えば、あるデータによると、内モンゴル自治区烏珠穆沁旗のモンゴル遊牧民（烏珠穆沁羊・Ujimqin Sheep）において産子率（100頭の雌が出産した産子数との比）は約100・2%である。つまり、100頭の雌ヒツジが1回に出産する子供は約100頭であり、単純にいつて双子がほとんどないということである。この数は、モンゴル遊牧民のヒツジが、圧倒的に多胎出産が少ないことを示す。そればかりか、モンゴル遊牧民では、早熟性と同じく双子出産が子育ての障害になるとして歓迎されていない。

一方、湖羊はといえば、あるデータによると産子率が206・5%、つまり、100頭の雌ヒツジが1回に出産する子供は約207頭であり、単純にいつてすべての雌が双子以上を産むことになる。この数字は牧畜民のデータと比べ格段に高い値だといえよう。

では、一体なぜ湖羊はこのように早熟性、通年繁殖性、多胎性という特徴を身につけたのであろうか。

じつは、湖羊は、その子ヒツジの皮を獲得する目的で生産されている。生まれたばかりの湖羊は基本的に生まれて数日中には皮にされてしまうのである。その皮は、衣料品の原材料として古くから珍重され、20世紀初頭の中華民国期にはすでに日本や欧米に輸出すらされていた。湖羊は、まさしく商品としての価値を有してきたのである。湖羊の育ってきた中国江南地方は、早くから商業が発達し、そこで行なわれる農業生産も商業経済の影響を強く受けている。その商業システムとのかかわりのなかで湖羊は改良されてきた。早熟性、通年繁殖性、多胎性といった湖羊の品種特性は、湖羊飼育が自給的な生業経済に位置づけられるのではなく、商業経済のなかに組み込まれてきたことを示しているのである。しかも、品種特性の改変は一朝一夕になされるものではなく、長期の継続的飼育によって初めてなされることからして、その商業経済のなかに組み込まれた歴史はある程度長いタイムスパンをもって考えられるべきであろう。

文字の国中国において、このヒツジについての文献記録が、12世紀中期以来残され

ヒツジの産子率

対象	産子率	出典
アフリカ諸牧畜民在来ヒツジ	114%	(Dahl & Hjort 1976)
(中国)		
烏珠穆沁羊 (Ujimqin Sheep: 内モンゴル自治区で中心に飼育)	100.2%	(鄭 1987)
蒙古羊 (Mongolian Sheep: 内モンゴル自治区で中心に飼育)	105%	(鄭 1987)
哈萨克羊 (Kazakh Sheep: シンチヤンウイグル自治区で中心に飼育)	101.6%	(鄭 1987)
西藏羊 (Tibetan Sheep: チベット自治区で中心に飼育)	103~105%	(鄭 1987)
湖羊 (Hu Sheep: 浙江省で中心に飼育)	206.5%	(蔣・何 1985)

田魚は、その体色で紅、黒、白、花（まだら模様）の四種に分けられている。そのうち、紅が全体の8割を占めるといふ。紅色を積極的に生み出すために、稚魚を生産する際は、人為的に紅×紅という交配を行なう。田魚のように魚体が紅色になることは、自然界でもたまに起こることである。しかし、自然界でそのような色をしていると目立ち、鳥や獣などの天敵に見つかりやすいため生存率は低くなり、その多くが淘汰される。田魚のようにそのほとんどが紅色であるということは、人々が積極的に系統選抜し、保護してきた結果であるといえる。

田魚の特徴は、その色彩にある。野生の鯉（マゴイ）、あるいは中国で養殖されている鯉は、そのほとんどが青みがかった黒色をしている。しかし、田魚は、日本で作出されたといわれる錦鯉と同様、鮮やかな色をしているのである。ただ、日本の錦鯉が観賞用として特化し、それを食べるとなるといささか躊躇されるのに対して、田魚の場合は完全に食用であり、多くの人々がその料理を前にして目を輝かせながら垂涎するのである。

田魚の特長は、その色彩にある。野生の鯉（マゴイ）、あるいは中国で養殖されている鯉は、そのほとんどが青みがかった黒色をしている。しかし、田魚は、日本で作出されたといわれる錦鯉と同様、鮮やかな色をしているのである。ただ、日本の錦鯉が観賞用として特化し、それを食べるとなるといささか躊躇されるのに対して、田魚の場合は完全に食用であり、多くの人々がその料理を前にして目を輝かせながら垂涎するのである。

田魚は、分類学上はコイ目コイ科のコイ (*Cyprinus carpio*) である。日本にもいる鯉と種のレベルでなら変わりはない。ところが、この田魚を育てる人々は、民俗的な分類によって鯉と田魚を明らかに区別している。鯉と田魚は地元の人々にとって、別の魚として認識されているのである。それは、その体が普通の鯉とは少し異なっているためである。もちろん、2本脚などついていたりはないが、明らかに普通の鯉とは区別のできる特徴を田魚はもっている。



田魚 紅色の田魚は縁起の良いものとして、祝い事や来客時に食卓へのぼる。

ている。それらをひもとくと、湖羊という品種の成立が、この地の農業の商業化と軌を一にしていることは疑いない。このヒツジの体には、中国江南地方の歴史が刻み込まれているのである。

### 文化が刻み込まれた魚たち

浙江省南部、温州の山間地に田魚と呼ばれる魚が棲んでいる。その名のとおり、山肌広がる棚田で飼育されている。稲をつくる間、田には水が湛えられ、そこで稲と一緒に田魚は育つ。水田

養魚は、中国ではそれほど珍しいことではなく、そのほとんどは食用であり、魚の入手の困難な温州の山間部において田魚もまた食用に供されている。田魚は、ただ食べるだけでなく、いっしょに育てられる稲にとっても有益なものと考えられている。

稲の落花を食べるところから「稻花魚」とも称されるが、その他、水田に落ちた害虫も食べてくれるという。また、田の土を適度に攪拌してくれるので、稲の根がよく伸びるという。

田魚は、分類学上はコイ目コイ科のコイ (*Cyprinus carpio*) である。日本にもい

では、なぜこの地の人々は紅色の田魚をつくり、守ってきたのであろうか。

それは、人々がきらびやかな紅色を縁起のよい色として好むからである。中国一般にいえることなのだが、「紅」という一字で、慶事けいじを象徴する布を示すし、また、それは「順調だ」「幸運だ」「人気がある」というよい意味で用いられたりする。中国で「紅白喜事」といえば冠婚葬祭を意味し、そのうち「紅事」は結婚式などの祝い事を指す。「紅蛋こうたん」といえは子供の生まれた家から親戚や友人へ贈られる赤く染めた縁起のよい卵であるし、「紅包こうほう」といったら慶事の折に配られるうれしいご祝儀のことである。お祝いの席には、紅色は欠かせない。新中国になってから、紅色は共産主義のシンボルカラーとなり、「紅」とは、革命的で政治的自覚が高く、共産主義思想をしっかりと身につけている人の形容に使われるようになったから、紅色はますます大人気である。田魚も、縁起のよい特別な魚と見なされ、祝い事や、来客のもてなしに使われる。この魚の体には、中国文化のなかに存在する価値観が刻み込まれているのである。

3世紀、『三国志』で有名な曹操せうそうの時代を描いたと思われる『魏武四時食制』に、「陝県子魚、黄鱗赤尾、出稻田、可為醬（陝県の子魚は黄鱗赤尾にして、稻田いねだに出づ、以て醬じゆと為すべし）」という記載がある。陝県とは四川省の地方であるが、つまりその水田から、黄色の鱗、赤色の尾の魚が出て、それで魚醬ぎょじやうをつくったということである。この「出稻田」というのが水田養魚を指し示すのかどうかは、現在でも

意見が分かれるところであるが、そんな古い時代にも、紅色の魚が食用に供されていたことは興味深い。ただ、当然のことながら、この赤い魚と田魚との関係について詮索せんさくすることは、どだい無理な話である。

### 人間理解のための動物

以上のように、現在の中国にも、ちょっと風変わりな動物たちが存在する。それらは、一瞥いちべつすると『山海経』に描かれるような奇獣、珍獣、怪獣ではないが、明らかに特徴的な、奇異な性質を保持している。そのような動物を見るにつけ、『山海経』に発揮された想像力が、単なる想像の世界のみに閉じ込められてきたのではなく、その世界から解放された現実の世界にまで流れ込んでいることを思い知らされる。

中国において、動物という実体は「あるがままの動物」はなく、「あるべき動物」としてデザインされているのである。中国において、湖羊や田魚以外にも豚などの家畜や金魚などの愛玩動物の品種が数多く創造されてきた。その創造力は、たゆまない想像力を基盤として成り立ってきたと見たほうがよさそうである。動物たちには、それが育はぐまれてきた歴史と文化が刻み込まれており、動物たちをよく見ると、その背景にある人間や社会を理解することができるのである。

